南詔國の成立と吐蕃との關係

藤澤義美

まえがき

南詔國は唐代後半期、今の雲南地方を中心に形成された一王國である。王統の初代と傳えられる細奴羅は、大理盆地南部の蒙化縣地方に據っていた蒙姓部族酋であった。彼が雲南地方の一有力部酋として頭角を現すのは、高宗の永徽初年（六五〇）前後頃のことであり、この頃、今まで大理盆地の覇權を掌握していた白蠻種系の張姓大部酋の勢力圏（白子國）が瓦解したものとみられる。

しかしながら、南詔が名實ともに一王國を形成するまでには、六代約一世紀半に亘る苦難の途を歩まなければならなかったのである。すなわち、初代から次代羅盛炎、三代盛羅皮までの間は蒙舍詔（南詔）の擡頭期であり、四代皮羅閣の頃はいわば勃興期であり、五代閣羅鳳在位間は一王國の建設期に當り、六代異牟尋の治世を南詔國の確立期とみなすことができる。

南詔が勃興して大理盆地の覇權を握るまで約九〇年の年月を要したのは、一つには、當時の雲南地方が唐朝の強力な經營下にあったことと、二つには、張氏支配權失墜後における大理盆地地帶の複雑な史的情勢—基本的には白蠻種と烏蠻種の對立があり、さらに、かつて張氏支配權下に從屬していたとみられる白蠻系諸部酋や烏蠻系六詔の對立抗爭があったからである。したがって、南詔が一王國を成立させるための最大の課題は、唐朝の支配下から脱することであったが、しかし、その過程において、今度は新興の吐蕃に四〇餘年間臣服することとなり、さらに、この羈絆か

ら脱する苦難を重ねなければならなかったのである。このような一世紀半に亘る一王國形成の多端な史的過程の道標は次の如くである。

△唐高宗永徽四年（六五三）頃、唐に初めて入朝、授魏州刺史（初代細奴羅）

△唐元宗開元一六年(七二八)、封臺登郡王(四代皮羅閣)

△唐元宗開元二六年（七三八）、封越國公、賜名歸義、其後册立雲南王（四代皮羅閣）

△同天寶一一年（七五二）、吐蕃に弟事、册贊普鐘南國大詔、號東帝（五代閣羅鳳）

△唐德宗貞元一〇年（七九四）、吐蕃を離れて歸唐し册立南詔＝南王（六代異牟尋）

ところで、南詔國成立の史的事情なり要因なりについては、いろいろの點をあげることができるが、要するにこれは、雲南地方における有力諸部酋の制壓と言ういわば雲南地域内部の主體的な史的要因と、他方では、唐朝と吐蕃と言う二大强國の支配から脱出するまでの對外的客觀的な史的要因とに大別してみることができるのであって、前者は王國形成への前提的要因ではあるが、なんと言っても、王國確立の絶對的要因は後者に求められねばならない。すなわち、南詔（蒙舍詔）は、唐朝の雲南經營に協力しつつ、その威力を背景に順次對立部族を制壓し、ほぼ雲南地方の實權を掌握すると、今度は唐・吐蕃兩國の對立抗爭を巧みに利用しつつ、まず、吐蕃の勢力を背景に唐朝の羈絆を斷ち、やがて、國内體制の整備と國力の充實を俟って、ふたたび唐朝と相和し、その力を借りて吐蕃への隷屬から脱したのである。

したがって、南詔國の成立史上において、唐・南詔交涉史の研究はもっとも重要な課題であることは言うまでもないが、他方では、吐蕃・南詔交涉史の研究も又かかすことのできない課題である。前者については比較的に史料も惠まれており、すでに、拙稿『唐朝雲南經營史の研究』（岩手大學學藝學部研究年報、一〇、一一、一三、一五卷）等にその大要を發表してあるが、後者については、史料上の制約もさることながら、何よりも、吐蕃の歷史がよく知られないと言う障壁があったのである。しかるに近年、佐藤長氏多年の勞作『古代チベット史研究』が公刊され、この方面の研究上に裨益するところが大きかった。

本稿は、南詔と吐蕃との交渉關係を南詔側から考察し、もって吐蕃の雲南地方への勢力伸長と、これに關聯して生じた唐・吐蕃兩勢力の角逐が、南詔王國の成立にどのような史的意義をもったかを明らかにしようとしたものであるが、今回は天寶末年の離唐までの間に限ることとした。

なお本稿では、取り扱う年代や範圍も廣いので、餘り細部の考證や比定等について詳記することはできるだけさけ、註記も最少限必要なものに限ることとした。（文中では、舊唐書卷一九七南詔蠻傳は舊南詔傳、新唐書卷二二二上南蠻傳は南蠻傳上、舊唐書卷一九六吐蕃傳上は舊吐蕃傳上、新唐書卷二一六上吐蕃傳は新吐蕃傳上、資治通鑑唐紀は通鑑、拙稿「唐朝雲南經營史の研究」は「經營史」とそれぞれ略記する。）

一　吐蕃の南下と南詔の動向

南詔が直接吐蕃（勢力）と交渉をもつようになるのは、少くとも史料上からみて、開元二五年（七三七）頃からのことである。しかし吐蕃勢力はこの以前から西南諸蠻に浸透を測り、常に成都からの入雲路（建昌溪谷路）における重要な中繼據點雋州（四川省西南部西昌縣）をねらい、もって、雲南諸蠻に對する唐朝の雲南經營を妨害しようとしたのである。この南下浸透しつつあった吐蕃勢力に對し、雋州管下の諸蠻（雋州蠻）や姚州管下の諸蠻（姚州蠻）がいかように反應したかは、當時の雲南諸部族の史的動向を探る上で、きわめて注目すべきことであり、又他方では、これら諸蠻の歸趨は直接唐朝の雲南經營に反映する問題であったが、これらの情勢は、一應唐朝の雲南經營に協力的態度をとりながら、徐々に實力を蓄えつつあった蒙舍詔の動向をさぐる上にも、貴重な手がかりとなるのであり、後述の考察とも關聯するので、ここでまず開元初め頃までについてみておきたい。

西南諸蠻の地方に吐蕃の壓力が感ぜられるようになったのは、早くも「安西四鎮を廢めた」[1]咸亨元年（六七〇）以後まもなくの頃からであったらしい。すなわち、これから三年後に、唐の太子右衞副率梁積壽が姚州道行軍總管となって姚州方面の叛蠻を討ち、この結果、昆明蠻十四姓二萬三千戸が內附し、さらに、雲南西部の永昌蠻をも討平したことが南蠻傳下や通鑑および新舊高宗本紀にみえているが

（詳細は拙稿「經營史」一の五項參照）、これは本紀にもみえている程であり、當時唐朝が、初唐以來約半世期を要して、仲々容易に服屬しなかった雲南西半部＝廣義の大理盆地の諸部族を抑え、麟德元年（六六四）、經營の基地を雲南東北都の南寧州＝郎州（今の曲靖附近）からさらに一歩を進めて、雲南の兩心臓部（東部の昆明盆地＝滇池や昆明市がその中心、および西部の大理盆地＝洱海と大理市が中心）を扼する姚州（今の姚安附近）に都督府を創設し、[2] 雲南經營の中心據點たる基地化に着手したばかりであったから、唐朝にとって、その後の雲南經營推進を左右する大事な征討だったと思われるが、こうした姚州蠻や雋州蠻の反唐活動の背後には、おそらく吐蕃勢力の南下と煽動のあったことをうかがわせるものがある。

これから數年後に至ると、吐蕃の西南諸蠻への浸透は明かに認められるのであって、通鑑卷二〇二、永隆元年七月條に

①先是、劍南募兵、於茂州西南築安戎城、以斷吐蕃通蠻之通。吐蕃以生羌爲鄉導、攻陷其城、以兵據之。由是西洱〔河〕諸蠻、皆降于吐蕃。

とみえている。[3] これによれば、梁積壽が姚州方面の叛蠻を大征討した僅か一〇年足らずして、大理盆地中心部の洱海地方に據っていた西洱河諸蠻が、唐朝から離れて吐蕃の勢力下にはいったことが知られ、ここにおいて、ようやく軌道に乘ったばかりの唐朝の大理盆地方面に對する經營は一頓座の餘儀なきに至り、この後、開元の初め頃までの約三〇餘年間に亘り、吐蕃は執拗に西南諸蠻への進出を續けたため、雋州蠻や姚州蠻の唐朝に對する反抗は常ならず、したがって經營の前線基地姚州の確保も困難になってきて、幾度か廢置をくりかえさねばならなかったのである。

高宗在位後半期における吐蕃は、ガル家出身の大論が三代續いており、とくに「其地、東は松・茂・雋と接し、南は婆羅門を極め、西は四鎭を取り、北は突厥に抵り、幅員餘萬里、漢魏諸戎のなき所也」（新吐蕃傳上）と言われた高宗晩年の頃は、吐蕃の隆盛に大きな役割を果した二代目ガルツェンニャの大論時代に當っており、吐蕃はこの時代に西南諸蠻の地方へも强力に進出してきたことが知られる。

しかし、この頃における吐蕃の西南諸蠻への進出に關し

ては、兩吐蕃傳や南蠻傳をはじめ、中國側史書にほとんど具體的なことを傳える記事がみえず、その動向を跡づけることはできないが、佐藤長氏の研究によれば（「古代チベット史研究」上卷三九五—四〇一頁參照）、吐蕃三代王がまつりごとのためニャ Myawa の國へ行き、そこにて逝きたることが吐蕃年代記にみえ、又、吐蕃編年記には、彼の功業を記して「その後、彼はジャン Hjan を支配し、白ニャ Myawa dkar po に賦稅をかけ、黑ニャ Myawa nag po を征服する等せり」とあると言うことである。

ここに出てくるジャンとは、元史卷一二一兀良合傳等にみえる白蠻察罕章（Tchaganjang）と烏蠻合剌章（Karajang）の章（jang）を想起せしめるものであるが、果してバコー氏やトゥサン氏が言う麼些族の名であるかどうかは、今これを比定すべき資料を持ち合せていないからよく分らないが、新吐蕃傳上の「虜南屬帳皆叛、贊普自討、死於軍」とあることや本項の前後の吐蕃の動向からみて、すくなくとも、雋州西部から大理盆地北部にかけての金沙江兩岸地帶の住民を指したものであることは確かであろう。この地帶には廣く麼些系種族が分布していたことは唐代でも同樣であり、又、この河谷地帶には白蠻種が居住していたことも南蠻傳や蠻書等から證せられるから、[4] おそらく、白ニャは白蠻種系諸部族を、又、黑ニャは烏蠻種系諸部族（多分その大多數は麼些系に屬する）を指したものと思われる。白蠻種は早くより高度の農耕文化民族であったから、これに賦稅をかけたのは當然のことであり、吐蕃が雲南地方に南下してきた一つのねらいは、當時すでに高度の水稻耕作を主生業とする白蠻種[5]（大理盆地を中心に分布していた）の農業生產力にあったと思われるのである。

ちなみに、吐蕃編年記に「ニャのカグラボン Kag la boṅ と稱されたるもの」とみえているのは、佐藤氏も指摘する如く、確かに南詔五代王の閣羅鳳（新唐書や通鑑には閤羅鳳とある）に相違なく、彼の在位中には大理盆地の北部溪谷地帶の鄧川や洱源（浪穹）邊までを支配したが、先述のジャンの大部分は吐蕃の勢力下にあり、なかなか南詔に服しなかったのであり、ことに、吐蕃三代王チトゥソンがこの地方に出陣中客死した八世紀初め頃には、南詔はまだ大理盆地南部の一有力部酋にすぎなかったから、いわゆるジャンの支配者ではなかったのである（南詔二代羅盛

炎の時代に當る)。

ところで、このような吐蕃勢力南下に對應する姚州蠻の動向や唐朝の經營基地姚州の確保に苦慮した様子については、武后の神功二年(六九七)五月、[6]蜀州刺史張柬之の上表文中に次の如く述べている(舊唐書卷九一張柬之傳)。

②(前略)姚州本龍朔中、武陵縣主簿石子仁奏置之。後長史李孝讓・辛文協、並爲群蠻所殺。前朝遣郎將趙武貴討擊、貴及蜀兵應時破敗、噍類無遺、又使將軍李義摠等往征、郎將劉惠基、在陣戰死、其州乃廢。……(中略)……

至垂拱四年、蠻郎將王善寶・昆州刺史爨乾福又請置州……(中略)……及置州後、錄事參軍李稜、爲蠻所殺。延載中、司馬成琛奏請於瀘南置鎭七所、遣蜀兵防守。自此蜀中騷擾、于今不息。且姚府總管五十七州、巨猾遊客不可勝數。……(中略)……伏乞、省罷姚州使隷雋州、歲時朝覲同之蕃國、瀘南諸鎭亦皆悉廢、於瀘北置關、百姓自非奉使入蕃、不許交通往來、增雋府兵、選擇清良宰牧、以統理之。

この切實なる訴えは武后の入れるところとならなかったが、當時、姚州經營の困難さをよく讀みとることができる。これはもちろん、雲南内部における有力諸部族間の對立關係や唐側經營當事者の方策の失敗、漢人の奸商・亡命者の横行などの事情もあったが、この當時、姚州蠻がしばしば反唐的態度に出た背景には、唐朝内部の武后をめぐる政情が雲南經營にも反映したことと、吐蕃の南進と言う客觀情勢が大きく影響していたのであって、前掲文中に「百姓自非奉使入蕃、不許交通往來」とあるのは、當時、吐蕃の觸手が姚州蠻に伸びていたことを物語っている。

又、通鑑延載元年條や南蠻傳下の永昌蠻條および新舊兩裴懷古傳によれば、武后の天授中、監察御史裴懷古が姚雋蠻首領等が反したので、遣使入雲して西南蠻を安集し、その魁首を俘し、ついに南方を定めて歸還し、延載元年に至り、永昌蠻大首領董期が部落二萬を率いて内附した。ところが、聖曆年間に至り、また姚州は不安な情勢になったらしく、姚州蠻首領等が懷古の善政を慕い、再び入雲を請うたので、唐朝はついに彼を姚州都督に任じたが、疾をもって辭退したことが知られ、この動きはさきの張柬之上表文中の動向と符合している。

この後、吐蕃勢力の南進はますます激しくなり、唐朝の姚州經營は危局を迎えるに至ったので、監察御史唐九徵を姚傷道討擊使となし、姚州の叛蠻を討ってこれを破り、俘虜三千人を得たが（舊唐書中宗本紀、通鑑景龍元年六月條）、この征討行について新吐蕃傳上には

③詔靈武監軍右臺御史唐九徵、爲姚傷道討擊使、率兵擊之。虜以鐵絙（繩橋のこと）梁漾・濞二水、通西洱〔河〕蠻、築城戍之。九徵毀絙夷城、建鐵柱於滇池、以勒功。

と言い、⑦吐蕃が金沙江を越えて大理盆地北部まで進出していたことを證明している。

ここにおいて、姚州方面の情勢はますます緊迫してきたが、これから三年後の景雲元年に至り、監察御史李知古の無謀な經營再興策により、唐朝の雲南經營は事實上中斷の事態にたち至ったのである（新舊兩吐蕃傳上、新唐書卷一九九徐堅傳）。この李知古事件について通鑑は景雲元年末條に次のように述べている。

④姚州群蠻、先附吐蕃。攝監察御史李知古、請發兵擊之、既降。又請築城、列置州縣、重稅之。黃門侍郎徐堅、以爲不可。不從。知古發劍南兵築城、因欲誅其豪傑、掠子女爲奴婢。群蠻怨怒、蠻酋傍名引吐蕃、攻知古殺之、以其屍祭天。由是姚傷路絕、連年不通。

以後數年の間、傷州蠻までが姚州蠻と呼應し、唐朝の韋氏の亂による朝政の空白に乘じ、吐蕃の後押しに對應して逆に蜀の西南邊境に寇するようになったらしく、新唐書卷五玄宗本紀には、開元元年一〇月、「姚傷蠻寇、姚州都督李蒙死之」とみえ、同書卷一九一吳保安傳には、この時同行した判官仲翔が蠻中に浮虜となり、奴使されること一五年にしてやっと生還したことが述べられている。又開元三年（七一五）には、西南蠻が邊に寇したので、右驍衛將軍李玄道が巴兵三萬人を發し、舊屯兵と幷せてこれを討ったことが通鑑や新唐書玄宗本紀に記されている。

以上によって、高宗の咸亨元年（六七〇）頃から玄宗卽位直後頃までの約四〇餘年間における雲南地方の史的情勢を、とくに吐蕃勢力の南進を中心にみてきたが、この間の南詔蒙姓部族の動向はどうであったろうか。この頃南詔は第二代羅盛炎の時に當り、三代盛羅皮が開元初年（七一三）に襲位しており、もちろん、いまだ大理盆地南部の蒙

化地方によっていた一有力部酋にすぎなかった。全般的にみて、この頃の雲南内部における諸有力部酋の動向に關しては、史書に傳えるところが極めて少く、僅かに經營史關係史料に散見するものからかいまみる程度にすぎないが、とくに、南詔の動向については入朝關係以外にほとんどその消息を傳えるものがないのである。

しかし、次の四代皮羅閣の時代に、急激に雲南制壓の勢威が發揮されたところをみると、必ずや、この二代、三代王の間に次第に實力を養い、勢力を增大して行ったに相違ないのである。その史的事情は、南詔蒙姓部族の、唐朝雲南經營と吐蕃の南下と言う二大外部勢力に對する對應の仕方について考察することが肝要である。しかも、この點これをさらに大理盆地内の他の有力部族の動向と對比してみることによって、ますますこの間の事情がよく察知されてくるのである。

一體に、初唐以來の唐朝の雲南經營史を通觀してみると、いわゆる姚州蠻諸酋は當初から反唐的で容易に唐朝へ服屬しなかったので、太宗貞觀末年から高宗永徵初年（六五〇前後）の數年間に亘る唐將梁建方や趙高祖の大征討にあい、盡大な打擊を蒙ったのである。この時、これまで大理盆地を中心に覇權を掌握していた張氏政權（白子國）は完全に瓦解したのである。史傳（記古滇說以下南詔野史類の傳える『白古記』系統史料）によれば、この時に、南詔初代の細奴羅が白子國の王位を禪讓したかのように述べているが、その方法は今しばらく措くとしても、南詔が白子國の後繼者をもって自任していたことは南詔國の成立史からみて知られるところである。しかし、當時の南詔はただちに大理盆地全體を抑える實力がなかったから、この後、開元二〇年頃までの間は、あたかも戰國時代のように、有力諸部酋が群雄割據して、互いに對立抗爭を續けていたものと推察される。こうしたいわば南詔勃興前夜の雲南情勢を洞察することは、南詔國成立史を理解する上で、もっとも重要なことであったにもかかわらず、今まで史料上の制約からよく知られなかったのである。

當時における雲南地方内部の部族割據の大勢を一瞥すると、まず、東部の昆明盆地には爨姓大部族が南北朝期以來大勢力圈を張っており、その西部から大理盆地東部にかけて王姓大部酋が居り、大理盆地には、かつて白子國に臣事

していたとみなされる白蠻系の大部酋、すなわち、楊・趙・段等の各姓が割據し、そのさらに西方の永昌盆地にかけて董姓大部酋が占據し、北方の金沙江北岸會理西邊には松外蠻の蒙姓大部酋が割據していた。このほか、大理盆地には洱海の南北に、南詔と同じく烏蠻系で互いに姻戚關係にあった蒙嶲・邆賧・浪穹・越析の五詔（五王）が分立していたのである。したがって、南詔勃興前夜の雲南情勢は極めて複雑であり、烏蠻と白蠻兩系の基本的對立關係もさることながら、これら兩種族は複雑に混住している地域が多く、又、諸大部酋は唐・吐蕃二大勢力の進出に對應しつつ、相互に離合集散の動きを續けていたのである。

ところで、さきに考察してきたように、吐蕃勢力が雲南に浸透してくるに及んで、大理盆地の東都・中部・北部の諸部酋は、その大多數がこれと呼應して、あるいは動搖し、あるいは吐蕃勢力を背景に反唐的態度をとったことが明らかとなったが、これらの部族は、そのために唐朝の征討を何回か蒙って、その都度勢力を消耗し、他方では、吐蕃からの重壓をも甘受しなければならなかったのである。しかるに南詔は、その據っていた地理的位置が大理盆地南部にあって惠まれており、吐蕃の壓力も直接受けなかったとみられるが、それにしても、初代以來一貫して親唐的態度をとり、唐朝の雲南經營に協力しつつ、ひそかに實力を蓄え、他部族の動靜をうかがいながら、機會の到來を俟っていたことが知られる。

その證據には、これまでに至る間の數次に亘る唐朝の征討關係史料中にも、又、さきにみた吐蕃關係記事中にも、南詔は全くみえていないからである。事實南詔は、初代細奴羅以來入唐していたらしく、次代羅盛炎は武后代に自ら入朝して大いに恩奬を蒙っており（蠻書卷三）、明の楊愼の滇載記（滇繫所收）に李知古事件を述べて「これより姚嶲路絶つも、羅盛炎はなお唐朝の正朔を奉じた」と言っているように、彼は在位四十年の長い間（この間にいわゆる姚州蠻は前述のように大いに動搖したが）、その親唐的態度を變えなかったのである。[8]

二　南詔の雲南統一と吐蕃關係

玄宗の開元年間に入ると、唐朝は開元三年における李玄道の大遠征を契機として、再び强力に雲南經營を推進して

行ったことが知られ、とくに同七年劍南節度使が創設されるに及んで、これが本格的に展開され出したことは、同九年に姚州が中都督府並の祿料に格上げされていることからもうかがわれる（唐會要卷七三）。ただし、玄宗代の雲南經營は、從來のような招諭懷柔と言う羈縻政策を基調としたものとは異なり、武力抑壓政策による強行の色彩が極めて強かったのが特色であり、これは劍南節度使が新しく直接の經營擔當者として登場してきたためと思われる。結果的にみて、南詔がこの頃勃興し、ついには唐朝の羈絆から脱して行くのも、このことと密接な關聯をもっているのである。

ところで、唐朝が本格的に雲南經營を推進するためには、どうしても、成都―雋州―姚州の入雲ルートを確保し、雋州蠻や姚州蠻の背後に迫ってきていた吐蕃勢力を驅逐し、これらの諸蠻を服屬させる必要があった。開元五年頃からしばらく少康狀態を保っていた唐・吐蕃兩國の抗爭は、再び同一五年から激しくなってきたが、同一七年に至り、雋州都督張守素が西南蠻を破り、同州管下の昆明（西昌の西南に當る鹽源縣地方）を拔き、漢代以來有名な鹽井のある鹽城を抑えたことが通鑑や新舊兩玄宗本紀にみえている。この史料には、直接吐蕃と戰ったことは言及していないが、この頃、唐は他方において大同軍や石堡城をも拔いて吐蕃へ攻勢に出ており、多分これらと一連の關係にあったものであり、武后末年以來、吐蕃の勢力下にあった同地方を抑え、さらに大理盆地北部の諸蠻に壓力をかけたものと思われる。ここに言う昆明は、武德二年（六一九）、南は昆明の地に接するをもって昆明縣を置いたところで、鹽井の良質なのがあるほかに鐵の產地でもあり、漢代以來この鹽鐵の利をめぐって攻守の據點となってきた所であるが（元和郡縣圖志卷三二雋州條）、吐蕃の南進においても、ここが樞要據點として重要視されていたらしく、今後も唐・吐蕃・南詔三者によって、この地方の攻防がくり返されたことが知られる。[8]

しかし、この大討伐以後も、同方面における吐蕃勢力の浸透は根强く、このため、諸蠻の服屬もなかなか容易でなかったことは、蠻書卷四に「粟栗兩姓蠻、雷蠻、夢蠻、皆在茫部臺登城、東西散居。皆烏蠻・白蠻之種族。（中略）夢蠻主苴夢衝。開元末、嘗受恩賜於國、而暮年又私於吐蕃」

と言っていることからもうかがわれる。したがって、吐蕃の侵攻から蜀川の地を守り、併せて入雲路（姚雋路）を確保して雲南經營を推進するためには、どうしても、永隆元年（六八〇）吐蕃の手に落ちたままになっていた安戎城を回復せねばならなかったのである。同城の攻防がすぐに姚雋路の確保にひびいてくることがよくうかがわれて興味深いが、おそらくこれは、當時吐蕃にとっての主な入雲コースが、西康省東部にある康定（打箭爐）を基點として四川省の石棉地方に出て、それから雋州經由の建昌路沿いによっていたことが知られる。[10]

安戎城の奪回作戰は、開元二六年（七三八）五月、劍南節度使に再任した王昱によって開始され、同城の左右に新城を構築して攻拒の據點としたが、九月に至り、吐蕃は精鋭をつくしてこれを救い、唐軍は大敗した。代って章仇兼瓊が劍南節度使を代行し、翌年三月に吐蕃軍を大破して、ついに六〇年ぶりで奪回し、これを確保したのである。この大攻防戰の樣子については舊吐蕃傳上に詳しく述べられている（新吐蕃傳上、新舊兩玄宗本紀および通鑑にも詳記）。[11]

ここにおいて、唐朝（劍南節度使）は入雲路を確保したので、ますます雲南經營に力を入れ、成都より安南に通ずる步頭路（姚州—安寧—紅河—交州）の開發に盡力したのである。しかもその經營や開發の仕方は、寧遠軍（雋州西方）管兵一千人、昆明軍（昆明縣）同五千二百人、會同軍（雋州管下最南端の會川縣＝今の會理縣）兵力不明、雲南軍（姚州）同二千三百人、澄川守捉（姚州の東方）同二千人（通典卷一七二州郡典、元和郡縣圖志卷三一成都府條）と言ったように、各要所に大量の軍兵を鎭守させつつ、現地住民の生活權を無視し、糧食や勞役を强制的に徵發し、さらに現地民古來から愛用していた鹽井を獨占すると言った强壓ぶりであったから、群蠻はにわかに動搖し出し、開發にからむ唐側と諸部族との間にしばしば紛爭を惹き起したのである。次に出てくる安寧城の鹽井の紛爭事件などはその代表的一例である。結局この結果は、終始唐朝に親近的であった雲南東部の大姓族爨氏の離唐となり、やがては張虔陀事件を契機として南詔も反唐的態度に踏み切ることとなったのである。

ところで、この開元年間における南詔の動向をみるに、

開元年間の前半は三代盛羅皮の頃に當るが、彼の動向については史書に傳えるところが至って少なく、具體的なことは分らないが、開元の雲南經營復興に當って、從來からの親唐的立場を守り、これに協力していたことは次代王の動向からも推察され、この頃から南詔が著しく擡頭してきたことをうかがうことができる。[12]

南詔は四代目の皮羅閣を迎えていよいよ勃興の機會をつかむに至ったのである。彼は開元一六年（七二八年）に三一才で襲位したと傳えられるが（楊愼南詔野史卷上）、その在位期間は丁度、開元後半期から天寶七年（七四八）までの、劍南節度使管下の雲南經營最盛期に當っており、巧みに唐・吐蕃兩勢力攻防の間隙をぬい、あるいは、唐軍の威を利用しつつ、次から次へと、雲南地方の對立部酋を打倒して行き、ついに雲南における覇權を掌握したのである。以下これら擡頭の史的動向を概觀しつつ、吐蕃との交渉について考察してみたい。

まず、蠻書卷三によると、

⑤盛羅皮卒、子皮羅閣立。朝廷授特進臺登郡王、知沙壺州刺史、賜名歸義。長男閣羅鳳授特進兼楊瓜州刺史。

（向達著『蠻書校注』の校訂文による）

とあって、皮羅閣が唐朝に協力の功により、初めに臺登郡王に封ぜられたことが知られる。[13] 臺登は雋州の北部に當り、今の冕寧縣の地で、姚雋路を守る西方の防禦據點であり、漢代以來城寨のあったところであるが、この位置から考察すると、おそらく南詔は、前述の開元一七年、雋州都督張守素が同州管内の西南蠻を征討した時に、召されてこれに協力し、大いに功績を上げたものとみられる。そして、雋州管内の北門の守りたる臺登郡王に封ぜられたのは、從來吐蕃の南下コースに當る重要地點を防禦する意圖がうをがわれるのである。これは中國古來の「夷をもって夷を制する」の方策であり、事實、この後も唐朝は南詔の協力を利用して、服屬を喜ばない他の部酋を制壓させたのであって、ここに南詔勃興の機會があったのである。要するに、南詔はようやくこの頃より、大理盆地の他部族を壓する程の實力が備わり、直接吐蕃勢力に立ち向う武力を持つに至ったことがうかがわれる。

前掲史料によれば、皮羅閣が臺登郡王に封ぜられた時、長男の閣羅鳳は陽瓜州刺史に任ぜられているが、蠻書卷五

の蒙舍川條に「而蒙舍北有蒙舍詔、卽ち楊瓜州也。同在一州」とあって、蒙舍詔の據地が楊瓜州だったことが分る。この州については、滇池西邊の安寧縣に據っていた王姓大部酋の河東州刺史王仁求碑文（雲南通志稿卷一九五所收）中に「陽瓜州刺史蒙儉實治其亂。咸亨之歲、云々」とみえており、高宗の咸亨年間にはすでに存在していたことが知られ、向達や馬長壽はここが蒙舍詔の據置であり、すなわち白崖城の地であって、今の彌渡縣境だと考證しているが、この說は信ずべき新說だと思われる。[14] いずれ、こうみてくると、五詔の中で最初に南詔が合併したのは蒙舍詔であり、その年代は右の考察からみて、少くとも、閣羅鳳が陽瓜州刺史に任ぜられる以前であるから、多分開元十七年以前のことに相違ない。[15]

こうして、ようやく大理盆地南部に强力な地盤を築き、姚州を基地とする唐朝と結んで、いよいよ大理盆地內の白蠻系大部酋や他の烏蠻系四詔の制壓に着手したのである。この年代や經緯およびこれらにまつわる諸部族間の動向等については、ここには割愛しなければならないが、まず、洱海西邊によっていた白蠻系部族（段姓大部酋など）を討平したのが開元二五年（七三七）であり（蠻書卷五、大和城條、したがって、洱海南部の白蠻系部族の據地（趙姓、王姓、楊姓、董姓大部酋、とくに石和城（渠斂趙館、今の鳳儀縣の地）や石橋城（龍尾城、今の下關縣の地）が攻陷されたのは、少くともその前のことであったことは間違いのないところである。[16] このことにつき南詔德化碑文（金石萃編卷一六〇所收）中に、

⑥洎先詔（皮羅閣）與御史嚴正誨謀靜邊寇。先王（皮羅閣）統軍打石橋城、差詔（閣羅鳳）與嚴正誨攻石和子。父子分師、兩殄兇醜。加左領軍衛大將軍。無何又與中使王承訓同破劍川。……（中略）……二河（西洱河と東洱河）既宅、五詔已平。

とあるのをみると、この洱海南部を平定する時、御史嚴正誨（唐官）と謀ったとあり、又その後大理盆地北部の劍川を破った時も、中使王承訓（唐官）と行を共にしていることが知られ、すなわち、唐軍援護のもとに對立部族を次々に制壓しているのは興味深い。

又、西洱河蠻を討った時、蠻書卷三の邆賕詔條に「其子哖羅皮後爲邆賕州刺史、與蒙歸義同伐靜河蠻（西洱河蠻）、

遂分據大釐城。哔羅皮乃歸義（皮羅閣）之甥也。云々」とあって、南詔と姻戚關係にあった邆賧詔の兵力を利用していることが知られる。この時、破れた白蠻大酋の一部はその衆を率いて大理盆地の北部に逃げたらしく、南蠻傳下の西洱河蠻條に「開元中、首領始入朝、授刺史。會南詔蒙歸義拔大和城、乃北徙更羈制於浪穹詔」とみえている。この西洱河蠻は東洱河蠻（洱海東南邊の鳳儀縣の地方）とともに、かつて姚州蠻と呼ばれた中でも、もっとも反唐的で仲々唐朝に服さず、常に吐蕃の南下と相呼應して蠢動していたものであり、このため、唐朝の雲南經營上の一大癌であって、絶えず姚州が不安定な狀態におかれていたから、唐朝としても、これを討つことに異存はなかったのである。

次に四詔の併合についてであるが、これに關する史書の記述は極めて簡略であり、かつその年代についても、南蠻傳上に「開元末」とあるだけで、他史書は明記せず、かつ、西洱河蠻の討平と前後にからみ合って述べているために、詳細な考證を要するが、いま、この結論だけを述べれば、それは開元二五年西洱河蠻討平後まもないことであって、少くとも開元二六年前半期までの間である。と言うのは、皮羅閣は西洱河蠻討平の功により、越國公に封ぜられ、歸義の名を賜わったのが同二六年（初め頃か）であり（唐會要卷九九、舊南詔傳）、さらに、五詔併合と吐蕃を伐った功績により、雲南王に册立されたのが開元二六年九月のことと通鑑が明記しているからである。[17]

ところで、この大理盆地の平定作戰がいかなる史的情勢の下に行われたものであるかを考察しなければならない。このことは、四代皮羅閣時代に南詔が勃興して、一王國を形成するための基盤を短期間に作り上げた史的事情を知る鍵なのである。まず第一に想到すべきは、開元二六年には、前述の安戎城をめぐる大攻防戰が開始されていたことであり、又他方では、吐蕃の大軍が河西地方に入寇し、唐軍がこれを擊破大勝していることである。大理盆地は唐にとっても、吐蕃にとっても防備上もっとも手薄な時に當っているのである。第二に、この頃吐蕃は安戎城を守るため、河西と雲南大理盆地北部に陽動作戰を行った形跡が認められる。その證據には、西洱河蠻討平の前に、まず南詔が唐の中使王承訓と力を併せて北部の劍川地方で吐蕃勢を破っており[18]（前揭史料⑥）、四詔併合の際には、舊南詔傳、

南蠻傳上、通鑑ともに皆「ついに吐蕃を擊破した」ことを述べているからである。これは、劍南が主力を安戎城奪回作戰に動員していた關係上、雲南地方は防備が手薄になっていたから、吐蕃の陽動作戰に對抗するために、南詔の兵力を利用したものであることが知られるのである。これは南詔にとって絶好の機會だったのであり、この機を利用して互いに姻戚關係にあった四詔をも討平してしまったものらしい。張氏白子國の後繼者を自任してきた南詔は、大理盆地の平定が多年の宿願であったと思われるが、今までは、唐朝に服屬協調の立場にあり、他方では、吐蕃勢力が大理盆地の北部に浸透してきており、大理盆地周邊の對立する白蠻系部酋や他の四詔が、吐蕃の威力を背景にしていたために、容易に軍を動かし得ない立場にあったものと思われる。この討平の結果、前述の西洱河蠻酋の一部のほかに、越析詔を除く三詔の殘黨は皆大理盆地の北部深くの劍川以北に逃げ込み、吐蕃の庇護によって三浪詔と呼ばれ、その後德宗の貞元一〇年頃まで餘勢を保ち南詔に對抗していたのである。したがって、南詔が王國を確立する一つの重要課題として、大理盆地の奥北地帶から吐蕃勢力を拂い、もってその許に南詔へ對抗し續けていた諸部族を完全に服屬させる大事業があったが、これは對吐蕃の問題として、六代異牟尋に課されることになったのである。

その前に、四代皮羅閣のなさねばならなかった當面の課題は二つあった。それは、東方の昆明盆地を支配圏に入れることと、唐朝の支配と强壓から離脱することであった。彼は開元末までに大理盆地の大半を平定して、唐朝から「雲南王」に封ぜられ、南詔王國の基礎を築いたが、名實共に「雲南王」となるためには、なお東半部の平定事業が殘っており、天寶七年までの間にこれを手がけて成功し、唐からの離脱は次代の閣羅鳳に課されることとなったのである。

今までほとんど雲南東部の昆明盆地にはふれ得なかったが、こちらの方はどのような史的動向にあったのであろうか。古來からの雲南史を通觀してみると、古代から南詔國が雲南地方を統一するまでの雲南史は、大きく東と西の分野に分れており、いわば東部の昆明盆地中心の文化圏と西方の大理盆地中心の文化圏とに分れて、それぞれの歴史が展開され、特色ある文化圏を形成してきたのである。東方

は滇池を中心に、漢代には滇國が存在し、その都城のあった晉寧縣の地からは、近年漢代頃の古墳が發掘されて、斯學方面に一大關心を起させたが[19]、出土品の青銅器や鐵器からみると、それ程文化の發達が遲れていたわけではないのである。その後南北朝期から唐代までは、爨姓大姓部族による一大勢力圏が形成され存續してきたのである。そして、この地方には、漢代以來漢人が入雲して原住民と混血していた形跡がみとめられ、したがってこの文化圏には、比較的にみて、中國文化と親緣的であることが特色である。だから、漢代以來の中國各王朝の雲南經營史をみると、大理盆地に較べて、その經營が順調であり、比較的に平穩であって、これは唐代の雲南經營史上では、もっとも對比的な現象であった。

これに對して、西部の大理盆地は、古來からの白蠻種（明清代の民家、現在の白族）原住の地であり、南詔國出現以前には張姓大族による一大勢力圏が形成されていて（白子國）、東の爨姓と併立していたものとみられ、前漢代には昆明の國、後漢代には哀牢の國と呼ばれた。しかもこの文化圏は蜀地方からの中國文化も流れ込んではいたが、さらにビルマ・ルートからの印度文化東漸の影響がうかがわれ、それにチベット文化との接觸もあって、東部とは大分趣きの違った特色がみとめられるのであって、すでに南詔國の出現以前において、大理盆地には相當程度の固有文化が形成されていたのである。南詔國が文字通りの蠻夷の地域に忽然として現われたわけではなく、それなりの前史が早くから形成されていたことが認められるのである。[20]

皮羅閣が雲南東半部に一大勢力圏を形成していた爨姓大部族を、何時どのようにして打倒し、その勢力下に收めたかを具體的に述べる史書は見當らないので、間接的な史料から考察するほかはないが、これが瓦解して、その實權が南詔の手中に握られるようになったのは、大凡、天寶五～六年頃であったと思われ、その契機となった事件は、唐朝の步頭路開發にともなう安寧城の構築をめぐって起ったのである。この事件について南詔德化碑文には次の如く記している。

⑦初節度章仇兼瓊不量成敗、妄奏是非。遣越傷都督竹靈倩、置府東爨、通路安南。賦重役繁、政苛人弊。被南

寧州都督爨歸王（以下四名略）南寧州大鬼主爨崇道等陷殺竹倩、兼破安寧。

これをみると、入雲コースの姚僑路がようやく確保され、常に姚州をおびやかしていた大理盆地も南詔によって平定され、その後天寶年間に入ると、劍南節度使によって、雲南經營の重心が安南通路すなわち步頭路の開通事業に移されていることが知られ、しかも、その開發の强行ぶりは誠に粗暴なものだったことがうかがわれる。しかも、爨姓一族の西の據點であった安寧の地に前線基地を構築し、原住民を苦役し、重稅をかけ、さらに鹽井をも奪い取っていたことは、南蠻傳上に「天寶七載、（中略）初安寧城有五鹽井、人得煮粥自給。玄宗詔特進何履光、以兵定南詔境、取安寧城及井」とあることからも知られる。

この騷動で、唐側は早速鎭兵を動員して、都督の李宓等が安寧城を回復したらしいが（天寶六年頃のことらしい）、この時に、再び南詔軍を利用して爨氏を討たせたのであって（南蠻傳下、德化碑文）、南詔にとっては願ってもない好機會だったのである。この後、どのような經緯を經て、南詔がその實權をうばったかについては全く分らないが、さしもの永い歷史と傳統を持った爨姓大部族の地盤だっただけに、容易に南詔の支配に服しなかったらしく、閣羅鳳の時に二十餘萬戶を雲南西邊の永昌地方に强制移住させたと傳えられている（南蠻傳下）。要するに、これ程の爨姓大部族がもろくも短期間に瓦解したことについては、それなりの史的事情があったのであって、第一には、この部族が多くの內部分裂を內包していて、この頃特に、曲靖地方に據っていた歸王一族と安寧に據っていた崇道一族間に抗爭分裂の樣相を呈していたことが知られ、第二に、南詔がひそかに結婚政策や歸王側に欵を通じて、巧みにこの內紛を助長させていたことがうかがわれる。第三には、天寶期に新しく展開してきた唐朝の雲南經營による彼等一族の動搖であった。

四　南詔の離唐と吐蕃關係

五代閣羅鳳は天寶七年（七四八）に三六才で襲位し三〇年間在位した。先の安寧城事件が勃發した直後のことである。彼は南詔歷代王の中で、もっとも剛勇な武將であり、先王代の大理盆地討平には、太子として常に先陣を率い、

東奔西走して武勳を立てていたことがよく知られる。念願の雲南地方平定をほぼなしとげた南詔にとって、獨立王國を實現する最大の課題は唐朝の覊絆から脱することであったが、卽位二年後の天寶九年、彼はついにこれを斷行したのである。その契機は、各史書共に雲南太守（雲南都督）張虔陀事件として傳えているが、通鑑卷二一六天寶九年一二月條には次の如く述べている。

⑧楊國忠德鮮于仲通、薦爲劍南節度使。仲通性褊急、失蠻夷心。故事、南詔常與妻子俱謁都督、過雲南（姚州）。雲南太守張虔陀、皆私之、又多所徵求。南詔王閤羅鳳不應。虔陀遣人、詈辱之、仍奏其罪。閤羅鳳忿怨、是歲、發兵反、攻陷雲南（姚川）、殺虔陀、取夷州三十二。

しかし、南詔が意を決して敢えて唐朝に反旗をひるがえしたのは、決してこの張虔陀なるものの貪妄ぶりだけでなかったことは容易に察せられるところである。南詔が離反するに至った理由については德化碑文中に六ケ條をあげているが（これは南詔側の釋明文ではあるが）、崇道にまつわる一ケ條を除く他の五ケ條は、みな南詔に對する唐朝の重壓を訴えていることが知られる。事實、初唐以來極めて協調的であった唐・南詔關係も、開元末年頃の大理盆地平定の頃から、唐朝は次第に南詔の實力を危惧し出した形跡がうかがわれるし、これが爨姓討伐前後に次第に表面化し、これ以上强大化する南詔を恐れて、急に重壓をかけてきたことが推察される。

ここにおいて、唐朝は大軍を動員し、翌年の天寶一〇年、一二年、一三年と三度雲南に遠征し南詔を討ったが、その都度大敗を喫し、間もなく安史の大亂が勃發するに及んで、雲南經營は終りを告げることとなり、南詔は吐蕃に附して一王國の成立をなしとげたのである。これらの詳細な考察は、すでに拙稿「經營史」の三の二項および三項に述べてあるから、ここには割愛することとし、次に南詔の離唐事件をめぐる南詔と吐蕃との關係を考察することにしたい。

いかに雲南地方の對立部族を打倒し、同地域内に並ぶものなき地位を築いた南詔と言えども、獨力だけで唐の大軍を破ることは出來なかったはずであり、この背後に吐蕃の加勢があったことは容易に察せられるところであり、事實

またその通りであった。通鑑卷二一六、天寶一〇年四月條には、この間の事情を説明して次の如く述べている。

⑨劍南節度使鮮于仲通、討南詔蠻、大敗於瀘南。時仲通將兵八萬、分二道、出戎雋州、至曲州靖州。南詔王閣羅鳳、謝罪、請還所掠、城雲南而去。且曰、今吐蕃大兵壓境。若不許我、我將歸命吐蕃。雲南非唐有也。仲通不許。囚其使、進軍、至西洱河、與閣羅鳳戰、軍大敗。……（中略）……閣羅鳳斂戰屍、築爲京觀、遂北臣於吐蕃。蠻語謂弟爲鐘。吐蕃命閣羅鳳爲贊普鐘、號曰東帝、給以金印。

これについては南蠻傳上にもほぼ同様の記事があるが、この三度の戰いをめぐる南詔の動向については、幸いにも南詔側の唯一の紀年體史料である德化碑文（唐の降臣鄭回撰文で漢文）に詳記しているので、吐蕃の動向もある程度知ることが出來る。これをみると、先の史料の中で「今吐蕃大兵壓境、云々」については、

⑩即便就安寧再申衷懇。城使王克昭執惑昧權、繼違拒請。遣大軍將李克鐸等帥師伐之。我直彼曲、城破將亡。而仲通大軍已至曲靖。又差首領楊子芬與雲南錄事參軍姜如之齎狀披雪。往因張卿譏構、遂令蕃、漢生猜。贊普今見觀釁浪穹。或以衆相威、或以利相導。云々。

とあって、これをみると、吐蕃は雲南の動向をよく察知しており、南詔と唐朝の間に隙が生じたとみるや、すかさず大理北奥地方に兵を動かし、南詔に對して一方は壓力をかけると共に、他方では觸手を伸していたことが知られる。南詔が密かに吐蕃に通じていたのが先なのか、あるいは又、南詔が陳謝辯明しているように、唐朝が疑った結果として南詔が唐に對抗上止むなく吐蕃と結んだのかは分らないが、當時の客觀情勢からみて、南詔が一時吐蕃と和して唐朝の重壓をはねのけるのは當然の歸結であったと思われ、要はいかなる契機によって決斷するかが問題であったろうと思われる。德化碑文によれば、天寶一一年正月一日をもって、邆川において贊普鐘南國大詔に册立され、長男の鳳迦異は大瑟瑟告身、都知兵馬大將を授けられている。ここに南詔は唐の支配から脱するために、一時吐蕃に臣附し、兄弟國の關係にあまんじなければならなかったのである。この年南詔は年號を贊普鐘（吐蕃王の弟の意）と建元した。

唐軍が再度南詔を討った時にも、更に翌年第三回の大征討軍を送った時にも、吐蕃は神州都知兵馬使論綺里徐を遣わして南詔を援けたことが德化碑文に明記してある。吐蕃の神川節度使は大理盆地最奥の金沙江沿いにある鐵橋から西北よりの地にあったらしい。

唐朝が三度の遠征に疲れて兵を止めて間もなく、安史の大亂が起きて、西南蠻地方への防備が手薄になると、吐蕃が今度は南詔の兵力を利用して、雋州地方からの唐勢力驅逐に着手し、天寶一五年（至德元年）には雋州を伐っており、翌至德二年には臺登と昆明の鹽城を攻略していることが德化碑文に見えているが、これについて、南蠻傳上には「會安祿山反、閣羅鳳因之取雋州會同軍、據清溪關、以破越析梟于贈、西而降尋傳・驃諸國」とあり、閣羅鳳は吐蕃と共に、南詔の反抗分子がたてこもっている大理盆地北奥地帶から金沙江北岸地方を掃討し、更に姚雋路を抑えて、唐朝が再びこのコースよりに入雲するのを防止したことが知られる。

こうした軍事行動は、この當時にあっては、南詔と吐蕃の利害が一致しており、互いに利用し合っていたのであるが、やがて、南詔が一王國としての國內建設が一段落し、名實共に王國の體裁や國內整備が出來上り、やがて、自主獨立の氣運が生ずるに及んで、今度は吐蕃からの重壓を痛感するようになり、再び唐に和してその加勢を得、吐蕃との關係を清算せねばならなかったのである。この大きな課題は六代異牟尋の登場を俟って、ついに德宗の貞元一〇年（七九四）に斷行され、南詔國はここに確立したのである。南詔が唐と吐蕃と言う二大强國の間にあって、よく兩者の國際政局を洞察し、これを利用しつつ新興國家を成立せしめたが、これは三代間の王が優れていただけでなく、その許に少からず唐人が歸化し、助言を與えていたからである。

註

① 安西四鎭の陷落については佐藤長著「古代チベット史研究」上卷三一五頁以下に考證している。

② 姚州の位置や設置年代等については、拙稿「經營史」一の五項參照。

③ 安戎城の位置は「茂州西南」とあるが、開元二六年唐軍の同城奪回作戰に關する舊吐蕃傳上の記事中に「蓬婆嶺」下の激戰の模樣が述べられているから、西川省西北部の最高峯雪山

南麓附近であったらしい。

又、唐が同城を築いた年代や、吐蕃がこれを攻陷した年代は、通鑑開元二六年九月條に「初儀鳳中、吐蕃陷安戎城而據之」とあり、さらに新舊兩吐蕃傳上や南蠻傳下の關係記事等から考察してみると、築城は儀鳳元年（六七六）頃と推定され、吐蕃の攻陷は儀鳳三年か四年（調露元年）頃のことだったらしい。

④ これについて馬長壽も同樣の見解を述べている。（同氏著『南詔國内的部族組成和奴隷制度』六九～九八頁）

⑤ 拙稿「南詔國の經濟史的考察」東京教育大學東洋史研究室編『東洋史學論集』第三輯參照。

⑥ 唐會要卷七三、姚州都督府條に「神功二年五月八日上表」と明記している。神功二年は聖曆元年に當り、通鑑は聖曆元年末條に述べている。

⑦ 新吐蕃傳上では、この後の李知古事件を先に述べている。なお、この時建立した鐵柱云々については、玄宗の開元後半期に玄宗が發した「勅吐蕃贊普書」にもみえている。（唐張九齡撰唐丞相曲江張先生文集卷一一、四部叢刊本）

⑧ 蠻書卷三に、三代盛羅皮が開元初に襲位とともに台登郡王に封ぜられたようにあるが、向達が『蠻書校注』で皮羅閣の誤記だと指摘しているのは、南蠻傳上や舊南詔傳の關係記事からみて妥當であり、この頃、南詔が僑州北隣にある台登郡王に冊ぜられるはずはない。

⑨ 蠻書卷七雲南管内物産の鹽の條に、次のような興味ある記事がみえる。

「昆明城有大鹽池。比陷吐蕃。蕃中不解煮法、以鹹池水沃柴上、以火焚成炭、卽於炭上掠取鹽也。貞元十年春、南詔收昆明城、今鹽池屬南詔。蠻官煮之、如漢法也」

⑩ もう一つの八雲コースは、西康省より金沙江や瀾滄江の溪谷沿いに南下して、直接大理盆地北部に至るものであるが、この經路は山岳疊々の山地帶であるために極めて險阻であり、行路の難は言語に絶すると言われるが（『支那省別全誌』雲南省、四頁）、それでも、チベット族はこの險阻な難路沿いに古來大理盆地と交易していたことは、蠻書卷二山川江源條に「大雲山、（中略）往往有吐蕃至賸貨易、云此山有路去贊普牙帳不遠」とあることからも知られる。

⑪ 安戎城攻防戰については、拙稿「經營史」二ノ二項參照。

⑫ 楊愼の南詔野史卷上の盛羅皮條には、開元二年張建成を遣使入朝させたとあり、清の倪蛻の滇雲歷年傳卷四には、開元元年、姚僑蠻が寇して姚州都督李蒙が死した時、「是年、盛羅皮始用兵於五詔」と記している。

⑬ 右の野史卷上に、先代盛羅皮が台登郡王に封ぜられたとあるのは誤りであろう。

⑭ 向達著『蠻書校注』五七頁、七一～二頁、一二一頁。馬長壽前掲書四三～四頁。なお、六詔の住地については吟味の要があり、とくに從來この蒙僑詔と越析詔については諸說紛々として定說を見ていなかった。この考證については別稿にゆずらねばならない。

⑮ 馬長壽はこれを開元初年（七一三）あるいは開元以前と言っているが、今にわかに贊同し得ない。（前掲書五七頁）

⑯ 蠻書卷三の六詔の卷頭に「開元元年中、蒙歸義攻石橋城、閣羅鳳攻石和〔城〕、亦八詔之數也」とあるが、「開元元年中」は「開元中」とあるべきであり、馬長壽も同樣に指摘している（前掲書六一頁）。今迄みてきた南詔の史的動向からみて、決して開元元年のこととはみなされない。

⑰ 馬長壽は越析詔の合併はその前であって、開元二十年前後であると言っている。（前掲書五八頁）

⑱ 通雲歷年傳卷四には開元二十五年條に、「皮羅閣統軍擊、又破劍川瀾河二蠻」と述べている。

⑲ 雲南省博物館編『雲南晉寧石寨山古墓群發掘報告』二冊、文物出版社一九五九年參照。

⑳ 拙稿「雲南古代の大理文化」史潮八二・八三合併號參照。

東洋史研究叢刊之十五

唐王朝の賤人制度

濱口重國著

A5判クロース製　本文五八〇頁

附索引　定價　二五〇〇圓

本書は玉井是博教授の「唐の賤民制度とその由來」および仁井田陞博士の「支那身分法史」第八章部曲奴婢法における貴重な研究業績の後を受け繼いで、唐王朝の賤人（賤民）制度を開元法に中心をおきつつ攷究すると共に、唐制の由來を遡った時代に探求したものである。

右書御希望の方は本會までお申込み下さい。

（國内送料は本會が負擔します。）

京都市左京區吉田本町　京都大學文學部内

東洋史研究會

振替京都三七二八番